（茅風　26号より再録）

草原再生セミナーで心に響いたキーワード
「なぜ私たちは草地を再生するのか」　草野　洋

草原再生セミナーの開催に当たり主催者から問題提起されたのは「なぜ私たちは草地を再生するのか」でした。いわゆる研修などでよく使われる「問いかけ」であるがこのセミナーではこの問題提起と講師の方々の報告に出てくるキーワードがうまく絡み合って最後まで満ち足りた時間を過ごしました。

各参加者が捉えたキーワードはその想いや動機によってそれぞれしょうが、私は、40 年間携わった森林･林業と重なったキーワードが心に響き、「なぜ再生するのか」の答えを求めて整理してみました。

モザイク

まず、捉えたキーワードは「モザイク」でした。報告のスライドの中でも、風景や草地の利用の仕方の結果としての植生などに「モザイク」が出てきました。

私の脳裏にある田園風景は集落の背後や周囲に「森林」と「田畑」、そして野草の花が咲く「草地」がある風景です。人と自然が密接に関わって形成される風景は自然にモザイクとなっています。

酪・農業と草地、林業と草地、住生活と草地の係りの結果として人々の営みに便利で合理的な配置が「モザイク」となり、周囲と馴染んだ美しい風景が形成されたのではないでしょうか。

北海道美瑛町のパッチワークの丘は私の大好きな風景です。ここは輪作や農作物の選択の結果、営農そのものが半自然的に「モザイク」となってすばらしい風景になっています。

また、宮崎県諸塚村は人工林（スギ、ヒノキ）と天然林がモザイク状に配置された美しい山村風景の中で木材やキノコの生産、農業が営まれる森林理想郷となっています。

これらのモザイク状の景観や森林風景を見れば美瑛や諸塚の人々の心の豊かさや生き方を感じることができます。

「モザイク」は水平、垂直に、時間の中にもあります。そしてモザイクの中にもモザイクが存在するという豊かな構造をしています。

このモザイクが今あらゆるところでおろそかになっているのではないでしょうか。

私たちはこれまで「モザイク・パターン」を「モノ・パターン」にすることが合理的と考えて、さまざまなものを単純で一斉なものに変えてきたのではないでしょうか。それが自然界のみならず教育・経済などにもさまざまなひずみを生じさせているのではないか。

草地が自然･風景の中のモザイクとして、人と自然の係わり方が生んだモザイクとして存在し続けることが人間と自然が健全に関わりあっている証であって、報告にあった**「モザイク性が多様性を生み出す」**のキーワードにつながります。

これらのキーワードは、たとえ小さくても縦・横・時間のモザイクをもつ草地を何とかしたいという想いを強くさせました。

私は、40 年間、現場で伐採・造林をはじめ行政マンとして森林・林業に携わってきました。

職に就いた頃は拡大造林の最盛期であり、水平的にも垂直的にも時間的にもモザイクに手を入れ人工造林という非モザイク状の森林を造成した一人でもあります。かといって、これまでの行為を後悔しているわけではありません。このことは次のキーワードである「無用と有用」で述べてみます。

無用（不要）と有用（必須）

セミナーの資料によれば明治 17 年の原野は国土の 3 割に及んだとされている。そして昭和 35 年に 120 万 ha であった「森林以外の草生地」は平成 12 年には 43 万 ha と国土面積の 1．1％に過ぎません。

草地は昭和 30 年代後半から 50 年代前半までに急激に減少していますが、この中でも里山（主に民有林）にあった草地の減少によるものが大きなシェアを占めています。この時期に世の中の「無用（必要なもの）」と「有用（不要なもの）」の間に大きな変化があったことを物語っています。この失われた草地も大昔はその大半が森林（自然林）であったことでしょう。

人々は人口の増加や農業の営みが拡大するに伴い草地が必要となり森林を草地にして手を入れて森林状態にならないようにして草地を維持させてきました。耕地の周りの森林は、「有用な草地」に対して「無用（邪魔）なもの」として開墾や火入れで森林になるのを妨げられてきました。

当時の人々にとって草地は「有用（必要なもの）」でした。食糧、家屋・屋根材、燃料、肥料、飼料、放牧として生活に欠かせない資材の供給源として、農地と一体として「利用を通じて管理」されてきたものでした。

その時代には多様な生物を棲わせる目的などたぶん眼中になかったでしょうが草地に咲く草花を季節や気候の良し悪しを知る指標として、草地に住む小動物や山菜は食糧として暮らしの中に織り込んで有用なものとして認めていたことでしょう。

「有用（必要なもの）」から「（不用）不要なもの」への変化は価値の変化でもあります。

価値は時代や人々の想いによって変化するもので、新たな価値が再認識されることもあるので「無用な

もの」が「有用なもの」へ変わることもあります。それが少なくなってくるとなおさらです。

これらの草地は、やがて、高度経済成長に伴って、一部を除き草地としては「無用なもの」として植林や放置により森林化され、また、リゾート開発などにより減少していきました。

この時期は、木材需要の増大に応える木材資源の培養と国土の保全のための拡大造林が隆盛をきわめ、草地は「有用（必要）でないもの」として忘れられ「モザイク性」を失っていきました。

私は前述したように拡大造林の一翼を担った一人であるが、当時は「有用（必要）でないもの」を対象に「有用（必要）なもの」「有用(必要)とされるもの」を作ってきたのであって、それはそれで是としています。

諸先輩とともに心血を注いで造成した森林が今日、木材資源として、また、CO^2吸収源として経済や地球環境に貢献する兆しが見えていることに意を強くするまでもなく過去の行為を誇りに思っています。しかし、それは「有用（必要）なもの」の視点から言えることであり「有用でないもの(有用でなくなったもの？)」に対しての配慮に欠けていたとの反省もあります。それは、「有用でないもの」の存在意義の本質、隠れた価値に目が届かず失われていくものや大義名分の影になって無用とされたものを気にかけなかったことです。

今、草地に何かをしないではいられない想いは、失ってみてわかった大切なものへの贖罪かもしれません。

気がづかないうちになくなっていくもの

トキが再び大空に舞いましたが朱鷺色がよみがえるために如何に多くの時間と労苦が払われたことでしょうか。

草地についても失われていくことに 40 年間も気づかないでいて今更遅すぎる行動かもしれません。

草地とそこで為された生活を支えた作業は、まさしく、気づかないうちになくなっていく風景や暮らしの象徴ではないでしょうか。まして、人との係わりでしか維持されない草地ですから気づいた時にその想いを形にすることが大切だと思いました。

小さなものに大きなキャパシティ

気づかないうちに失われていった草地は全国に 120 箇所余りが何らかの形で残されているそうです。全国規模でのモザイクとしてはいかにも心もとないがこの小さな存在が大きなキャパシティを持っていると知って改めて草地の存在の大きさに驚かされました。

それは生物の多様性の宝庫としての草地です。小さな面積でも草地には広大な森林に匹敵する多くの希少な生物が棲息しているという。いまや希少となった草地ですから種の数は森林にかなわないでしょうが単位面積あたりの種、なかでも絶滅危惧種が多いことは小さな面積で大きな収容力（ポケット）を持つ自然として存在意義が高いことを意味しています。

生物多様性の保全という目的の対象としては効率的で高品質であり、保全活動の場としては国・地方の施策とも合致するものです。

「どっこい意外なススキのバイオマス量」

ススキのバイオマス量は４．０２ｔ、アカマツは３．９ｔとのことススキの底力を知らされました。

「草地は火入れや放牧、採草などにより植物間の競争が緩和されることで特定の種による資源の独占が妨げられ、たくさんの植物が生育できたのである」

人工造林はこれとは反対にある種（スギ、ヒノキ）を独占させるために下刈などの作業で作り上げるものですが多大な労力のわりにはバイオマスにそう差がなかったのはちょっとショックでした。

草地の優れた新しい価値を再認識すべき時期だと思います。

自然の力・郷土の力・人の力のバランス

有用なものとして**「営みによる維持・管理」**がなされてきた草地が**「生物多様性の宝庫」**という新しい価値を得て「守る対象」として市民の目が注がれています。

しかし、「営みによる維持・管理」が行われてきた草地を「守る対象」として維持するには大きな壁があるような気がします。

それは「継続出来るか」ということです。昔のような「営みによる維持管理」だけではベネフィットとコストのギャップが大きすぎて長続きしそうにありません。

有用とされた時代までの草地は、自然の力と地域の力で有用なものとして維持されてきましたが過疎化や老齢化によりそのバランスは崩れています。

郷土としても新しい価値やベネフィットを付加して必要とするものに変えなければなりません。

それは、グリーンツーリズムや有機酪農業であり、そこにしかないもの（地域ブランド）を持つことかもしれません。このような草地を必要とする意識をもった地域とそれに共鳴する都会の人々などのボランティアが協働で維持・管理(利用)する時代だと思います。

特に、郷土の人々の心とベネフィットが草地を必要としないならば草地は動けないものですし自然の力をコントロールすることに不得手なボランティアだ

けでは長続きしないと思います。
　食の安全が脅かされている中での安心・安全な農産物の供給、高ストレス社会にあって心のふれあいを求めるグリーンツーリズム、そして未来からの留学生である子供たちの情操を育むための草地としての価値と利用法を構築することが重要です。

セミプロの出番

　郷土とボランティアが価値を共有しながら協働していくと市民側には市民的な価値や目的だけでは満足しないものが出てくるでしょう。その中から必然的にセミプロとなるものが出てくることでしょう。
　セミプロは継続の人であり老齢化や過疎化あるいは営農者の休養休暇に対するサポーターの役目を果たすばかりでなく新規参加者の指導者として人の裾野を広げる役目を果たすことになります。
　地域に信頼され密接な結びつきを持ったセミプロ達とボランティア感覚の市民が協働して新たな営みをしていくようになれば少なくとも今人々が係ろうとしている草地は新たなスキームで維持・管理されていくようになることでしょう。

子どもたちの歓声

　「阿蘇の子供たちの総合学習に知床の自然を題材にするような愚かな環境教育がおこなわれている」との報告があったがその土地で、先祖や祖父母・親が接して心の DNA に影響を与えてきた身近な自然や営みを

題材にしてこそ効果がおおきいでしょう。
　彼らを草地に引っ張り出し都会の子供たちと交流させながら将来の後継者群を育てることが大事です。

　その子供たちのたとえ１％が草地に関心を持ち筋金入りのプロ（地元）セミプロ（市民）の核となれば持続的な草地の維持・管理ができるのではないでしょうか。
　森林の造成に天然更新という施業があります。この施業がうまくいくかどうかは次代を担う群（後継樹）がどれだけあるかで決まると言われています。

「山地酪農の牛が草地再生ビジネスとして有力なブランドに」
「外国産の牧草は牛が流産しやすい」

　この言葉で私が中学・高校と親父から肥後赤牛の飼育を任されたことを思い出しました。市場から数十万円の子牛を買ってきてそれを育てて子牛を産ませるのですがその責任者が私であり、えさ、運動、敷き藁替えなどは中学生にとって結構つらい仕事でした。
　燕麦、レンゲ、ススキなど青草の豊富な季節はいいとしても生き物を飼っているのですから冬場のえさ（青草）の確保には苦労しました。もっぱら山でアオキ（林内に生える下木）や畦で彼岸花の葉や日当たりのいい草地でわずかに生える青草を採取したりして藁と混ぜて餌としました。
　純粋な地場産の飼料で育てていたわけで流産などさせたら大変なことで子供を産ませて市場に出して好い値がつくように家族中で懸命に世話したものです。

コモンズ

　「地球そのものがコモンズ（共有地）である」とのキーワードを新聞紙上で見つけました。そのコモンズがコモンズのままで残るように価値観やライフスタイルを転換すること、コモンズが汚染したり枯渇したりしないように人類が協定を結ぶことが求められていると主張していました。
　水や緑で縁のある郷土の「モザイク」を郷土の人と市民（よそ者）が新たな価値を付加したコモンズを「有用」なものとして心と力を合わせて継続させていくこと。
　上の原の茅場の再生は新たな「コモンズ（共有地）」としての試金石であり、萱場を通じて気付かないうちに失われていくものの大切さを知らしめるための活動ではないでしょうか。
　何らかの目的をもって草地を維持させる場合は積極的に人が関与しなければなりません。目的・目標があれば「ほっとけ草地」にはしないでしょう。
　これからの草地の維持・管理の活動は、目的を明確にし、新たな価値を含めて具体的に関連農産物の商品化、子供たちの参加プログラムの作成などを目標にすることも大事だと感じました。
　上の原の草地には「藤原の人々の心の拠り所である諏訪神社をはじめとする伝統的重要建築物の茅葺き屋根の修復」「藤原の魅力を広めて藤原の元気を取り戻す」というやりがいのある目標があります。
　「なぜ再生するのか？」の答えはこれらのキーワードに表されていますが私にとってはこれらのキーワードが心に響きむしろ「心の再生のため」と言いたいぐらい精神的な面が大きいように感じています。
　強いてまとめれば、草地をすぐそばにいない私たちが生きるため、そして地元の藤原にとって「必要なもの」するため……。
　このセミナーは藤原の皆さんと協働して草地の再生の歩を進める「森林塾青水」への参加意識が大きくなったセミナーでした。